

---

# さっちゃんとかーくん

薬丸

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

さっちゃんとかーくん

### 【Nコード】

N4755Z

### 【作者名】

薬丸

### 【あらすじ】

ごくごく平凡な中学一年生であるかーくんの前に突如として現れた奇跡のような少女であるさっちゃん。見目麗しき少女にはどうやら自分を追いかける理由があるそう？更に天使如き少女には色々な裏事情があるようで！

さっちゃんに振り回されるかーくんに振舞わされる周囲の人間の日常風景を主軸に、何故さっちゃんがかーくんに付き纏うのかという理由と共に描いていこうと思います。

## 初めに（前書き）

初めての作品投稿です。尊敬する色々な作品の影響を受けまくってます。

試し試しにやっ行って行こうと思いますので、読みづらい点、誤字脱字、意味不明な言語等あると思いますので、指摘してくださいれば嬉しいです。

## 初めに

僕の事を下らないと唾棄してくれている友人がいる。

最上の友人であるところのかーくん。

僕に欠けているもの、足りないものを全部補ってくれる唯一の存在。憧れの対象とか尊敬の対象とかじゃなく、畏怖するべき対象と言ってもいい・・・ああ駄目だね、そんな感情を向けること自体がおこがましいか。

だから歯痒い事に、彼をどれだけ褒め称えたくて誉めちぎりたくても、僕にはかーくんの至高さを伝えることは出来ないんだよね。

言うておくと、もちろんこれは僕の中での評価とかじゃなく、世界基準で人類史上とかのレベルだから要注意。

でも彼のことを説明せざるを得ないととなると・・・とにかく抽象的に、かーくんはすごいんだ！と言うしかないかな、馬鹿っぽくね。

実際僕が馬鹿だから伝えられないんだけど・・・そうやって茶化してる風にでもしないと情報の齟齬が怖いんだ。

だってそうじゃないと、もし僕の言葉が歪曲されて理解され、僕がかーくんの事を誤解しているように受け取られて、それをかーくんが知った日には、死ぬしかないから。

これが僕がかーくんに抱く感情の一部。

万の論文を約しに訳して千に選別し、千の説明を濾過して純度を上げて百に纏め上げ、百の文章を凝縮して十に抜き出し、十の言葉から真実を抽出して一に至らせるならば。

愛。

俺の事を素晴らしいと愛を振り撒いてくる人間がいる。

最悪の他人であるところのさっちゃん。

俺達普通の人間からしたら色々なものが飛び抜けてる規格外な存在。人が至れる極致をなんの躊躇いもなく踏破し、あらゆる事象を平然とやっつてのける。

あいつは何が出来るかを上げるかより、あいつには何が出来ないかを数えるほうが早い。

だから俺があいつを指すときは大体馬鹿と呼ぶ。

馬鹿っぽい存在なんだ。漫画とかの住人。現実にいるのに嘘っぽい。しかも善を突き抜けさせて悪を排除しきって行動する正義そのもので、人格は褒めたる点しかないってんだから手に負えない。

間違いなく断言しよう、圧倒的多数の人間はあいつに好意以外の感情を向けることは出来ない。

まあ俺はごくごく普通に嫌ってるけど。

だってさ、その麗しき超人様はなんの因果か平凡な一般人たる俺をすげーすげーと言ってかまって来やがるわけ。

どうすりゃいいんだよ。

つかなんで俺がこんな意味わからん支離滅裂な説明しなきゃならんのよ。

面倒だから死ぬか死ね。

・・・最後のはもちろん自分に向けての発言です。

これが俺のさっちゃんに抱く現実の全て。

一言で言うなら。

謎。

## 初めに（後書き）

まだ始めたばかりでよーわからん感じですね。この話以降も頑張っ  
ていきたいです。

## 01・前段階（前書き）

とりあえず切り良く書けるところまで。

## 01・前段階

中学一年生というのはどういう時期だろう。もちろん男女の違いはありつつ、適当にまとめしてみる。

子供ながらに大人に憧れ始めたり、将来が光り輝く眩い素晴らしいものだど勘違いし始めたり、  
男女の違いにどきまぎし始めたり、優劣の差を意識し始めたり、とにかく何かが始まる年だ。

納得できない方々には大雑把に、青春真っ盛りな時期と言ってしまえば丸く収まるのだろうか。

とはいっても今はまだ四月の下旬、入学式から二週間ほどしか経過していない。

何かが始まっていることに気づけるほどの余裕はないだろう。いくら順応が早い子供とはいえ、環境に対する慣れとはまだまだ縁遠い。

「具体的にいえばまだまだ寝れる時間があるのに、小学校時のやたらと健康的な生活習慣を崩せない、とかさ」

AM6:30

アラームが設定された遙か前の時間を指す置時計に目をやり、今だ使われた事のないアラーム機能を解除。

一度目が覚めると眠気がどこかに飛んで行く割と嬉しい体質なので、  
潔く二段ベット下段から抜け出して顔を洗いに行く。

部屋に備え付けられたユニットバスに向かい、顔を洗って歯を磨き、  
寝癖の有無をチェックして手と水である程度形を整える。

そして寝巻きのまま食堂へ。  
そう、食堂である。



ここは学園の敷地内ギリギリにある男子学生寮、更に言うならビジネスホテルクラスの設備を完備した全国でも稀に見る学生寮なのである。

と、ここでこういう風に紹介をしておけば、この学園が特殊であるという受け入れ態勢が整うだろうという打算があるので心積りをよろしく願います。

「なんて自分で言い聞かせなきゃいけない程、まだまだ非日常だよな」

独りごちている間に食堂に到着。

いくつもの長テーブルに簡素な丸いすが置かれた広いTHE食堂には人っ子一人いない。

そういう時間を狙ってきているので当然なのだが、やはり物寂しい風景である。

が、あと三十分もすれば人で溢れかえってどうしようもなくなるので、一人静かにご飯にありつける方が幸せな自分としては、朝練の生徒と通常生活の生徒の間隙であるこの時間帯は逃せない。

「すみませーん、美味しい朝ごはんください」

カウンター越しから第二陣の準備をして厨房に引っ込んでいるであろう寮監殿に呼び掛ける。

「あーはいはい、ちょっとだけ待ってねー」

イエス、今日は良い朝です。

返ってきた若い女性の柔らかな声に小さくガッツポーズをする。

「はい、お待ちどうさまー。うん、やっぱり君だったんだ、毎朝早

起きでえらいわー」

見た目二十代前半のおっとり美人が食事の乗ったお盆を持ってきてくれた。

「小学生の時の習慣が抜けないだけですよ、きっとすぐ自堕落です」

「あらそうなの？でもそういう習慣って抜けないからきつと習慣になっただんだと思うわよー」

「そうですかね？でもこうやって椿さんと話せる時間が作れるなら俄然続けますけどねー」

「くすつ、本当に君はおませさんだわー。うん、この台詞言ってみたかったのよねー」

「言われてみると若干気はずかしいですね。と、忙しいのに時間取っちゃってすいません」

「いいのよーこうやって食べてくれる人のことを知るのは今後の活力になるのよ？」

「真摯ですね、いい大人のお手本ですよ本当。じゃあ美味しくいただかせてもらいます」

「はい、それじゃあ今日も一日頑張つてねー」

「はい、椿さんも」

そう言つて美人寮監の椿さんと別れる。

白いご飯とお味噌汁、漬物と焼き魚、海苔という見事なテンプレートを前にして手を合わせる。

五人いる寮監の個人的に一番の当たりである椿さんを引けたことに対する感謝、もとい今日も美味しい朝ごはんに預かれることに感謝する。

「いただきます」

手を付け始めるとそこは成長盛りの子供なわけで、10分もせず吃完いたしました。

「ごちそうさまでしたー、良く噛む習慣つないといけないのに、ままならんなあ」

こつも美味しいとかき込んじゃうよねーと諦観を滲ませてお盆を持って返却口に行く。

そうして返却口傍にある洗い場で食器を丁寧に洗う。

定食屋では置きっぱなしで回収、またはローラーに乗っけて厨房の洗い場にまっしぐらというのが普通なのだろうけど、ここは教育機関の一端であるわけで、自分で洗い物をしてからの返却と相成るわけだ。

一応洗浄機に突っ込まれるから洗わなくても衛生面では心配要らないのだが、洗い物は寮則で決まっており、守らなければ数度の注意の後に食事抜きとなる非常に厳しい罰則もある。

洗い終わった食器をお盆に乗せ、返却口のローラーに乗せて流す。

そしてカウンターに寄り、

「ごちそうさまですー美味しかったです」

とお礼を言つて食堂を出る。

戻る間にもまだ人とはすれ違わない。

授業の開始が8：30。

寮の食事受け取り終了時間が8：00。

となると部屋着で食堂に行くとして7：30、制服で行くとして7：50ぐらいだろう。

そして現在の時間7：10である。

だいたい部活の朝練開始時間は6：30なことからして、間の一時間程廊下は無入である。

「思わず駆け抜け抜けたくなるな」

もちろんそんなことをして、眠れる若獅子達を呼び起こして怒りを買いたくないので、肅々と部屋に戻る。

そうして部屋に戻ってきてまずやることは軽い筋トレとストレッチである。

幼少からの習慣でこの時間は軽いジョギングを行なっていたのだが、さすがに校内、学校近郊でそれをする勇氣はない。

だから代わりの運動として筋トレとストレッチをお隣の邪魔にならない程度でするようになった次第。

20分程こなして、シャワーを浴び、髪を乾かして制服に袖を通す。そうする頃にはボタンボタンとドアが開く音が聞こえ始める。

制服に着替えたらもうすることもないので、昨日の夜の内に仕度を済ませたカバンを手に取り、俺もボタンと音を立てて出発する。

制服と私服が半々の生徒に紛れつつ、いや紛れるというのも変な表現なのだけれども、廊下を歩く。

と、すぐ近くで扉が開き、見知った顔が二名出てきた。

二人とも別クラスではあるが、何度か食堂でも話している割と仲の良い奴らだ。

「おっす伊藤君にモーリー」

「おはよう、今日は良い天気になるみたいだよ」

「ふぁーっ、とと、うっすー」

丁寧な返しをしてきてくれたのが美術の特待生である伊藤君で、欠伸混じりに気軽な挨拶をしてきたのがモーリーこと日本人とイギリス人のハーフであるチャラ男森君だ。

「用意早いね、日直？」

伊藤君は俺が手にもったカバンを見てにこりと爽やかに訊ねてきた。いつも早起きでこのぐらいの時間なのだが、部屋を出る時間は個々人でもちろんばらつきがあるわけで、伊藤君とは朝あんまり会わなかったから齟齬がある。

「いんや、いつもこれぐらいなんだ」

「まじか、その時間俺にくれ。まだまだ寝たりねえ」

「モーリーは時間やつてもその分無駄に使っただけだろうが、意味ねえよ」

「俺に対してはやけに厳しいなあい」

「はは、森君は遅くまでテレビとかラジオとか聞いているもんねー」

「ああ、伊藤には悪いとは思ってたけどな。迷惑かけないようにはしてるし勘弁な」

「仲いいねーそしてその心構えはチャラ男としてかなりの高評価だ」

「チャラ男ゆーな」

一見正反対の二人、まあ一見どころか中身もだいぶ違うのだが、どうやら上手くやっているようだ。

そして食堂と玄関の分かれ道まで来た。

「それじゃあ学校で」

「またなー」

「おう、んじゃまた学校でーああそつえば、今日の当番椿さんだぜー」

うを、まじか！という声を背で聞き、俺はそのまま学園へ向かうのであった。

学校までは歩いて10分弱ほど。

まあこの段階で学園の大きさを理解してくれると嬉しい。敷地内でありながら歩いて10分かかかる距離。

「これもまた非日常ってね」

まだ日常に定着していない通学路を歩きながら、運動部の掛け声なんかを聞く。

そろそろ朝練終了の時間だからだろう、やたらと声を出している部

がちらほら。

部同士で互いに競い合ってるようにも聞こえる。

そんな中陸上部の掛け声が聞こえてきたのでそちらに目をやる。

陸上部は走り込みを主とした朝練を行っており、その参加は有志としているのでさほど人数は多くない。

少し遠いが、その中にこれまた見知った顔を見つけたので手を振ってみる。

どうやら相手も気付いてくれたようで、控えめに手を振り返してきてくれた。

「真希ちゃんは足も綺麗だけど、心も綺麗だねー」

聞こえてないことを良いことに本心をさらけ出して、浮ついた心を隠す気もない軽い足取りで玄関口へ。

下駄箱へ付いてみたら早くも我クラスのマスコットキャラが定着しつつある理央いたので声をかける。

「理央、おはよう」

「あーおはよあー、早いねー」

「理央こそはいじゃないか、そついや日直だったっけ」

「そーだよ、まだねむねむだよあ」

欠伸を零しながら癒やし系シヨタマスコットの名に恥じめ雰囲気垂れ流している。

まあそついう所を突かれるのが苦手な奴なので、温かく見守るに徹する。

じゃないと、彼の目の端に水滴が溢れそうになるだけで女子達の非

難轟々を買っつことになる。

男子一名がそれを実践してしまい、登校一週間目にしてクラスメイ  
トの前で土下座を晒すことになったのは良い思い出。

「俺もねむねむだよ、教室に着いたら一緒に寝ようかな」

「うん、寝よー寝よー」

なんて美少女のようで美少女ではないかなり美少年の理央ときゃっ  
きゃうふふしながら、俺達は教室についた。

1-Eというプレートの下にある扉を開け、まだ無人だった教室に  
人の気配を灯す。

花瓶の水を入れ替えてくるという理央と別れて席につく。

自分以外誰も居なくなった教室を窓際最後列の自分の席から見渡す。  
今日もまた平穩無事な一日が始まるのだという平和な予測を胸に抱  
き、それこそがいいのだと想い、机に両腕をあずけて頬を乗せる。  
優しい日溜まりに心地よさと僅かな眠気を感じながら、目をつぶる。

「きつと今日はいいい日になる」

胸に抱いた予測を確信のように言葉に込めて吐く。

そう、この時の俺は確かに平穩だったのである。



## 01・前段階（後書き）

だらだらと日常を書きました。日常がひっくり返る今後に対する溜めですな。

## 02・朝時間（前書き）

まだもう少し続く日常の一幕。

## 02・朝時間

余裕を作り、環境に順応していくというのは新生活を始める上で非常に重要である事は言うまでもないことだろう。

そして自身に対する信頼を築けていない思春期門徒である我々はまず何をしなければいけないか。

それは自分はいまよくやっていけるのだ！という希望と自信を作り出すための土台作りである。

差し当っては今までの行動をなぞり、同じ小学校のコミュニティで固まって様子見。

入学式から一週間頃に余裕が出来たら友達づくり、というのが普通の学校に通う生徒の基本ルートであろうと思う。

そう、普通の学校であればの話。

この私立桜ヶ峰学園は生徒数は1500、一学年500を抱えるマンモス校であり、その七割強は他県から来ている。

俺は他県ではないのだが、同県でありながら正反対の位置にある学校から来ており、むしろ隣県の方が近いよ！という有様である。ついでに言うなら同学校の人間は一人もいない始末。

近くの学校から来ている人間もいるにはいるが、これだけの数だとクラスで二人いるかいないかという所だろう。

まあつまり、スタートラインが厳しいのだ。

新世界に対するクッションがないので、周囲を固めてから自分を作って新たな舞台の実感と相成るには少しばかり時間がかかる。

が、手間をかければいいというわけでもなく、チャンスを見誤ればクラス内のコミュニティに所属できない事も充分に有り得る。

そして学校開始二週間目ともなれば、コミュニティが出来始める時期である。今を逃して遅きに失すれば、人間関係において挽回が厳

しくなる事は想像に難くないだろう。

そんな悲惨な道を辿ることを本能的に皆理解し、忌避しているので、今現在でもぎこちないながらも必死に友達作りをしているというのが現状だ。

故に一時間目が始まるまでの時間は、戦場となる。

登校中、教室に入ってから、授業の準備をしだすまで第一戦は続く。

まあ散々重要であり肝要でありと話してきたけど、やるとなれば余裕の無い状態を更にあっぷあっぷさせねばいけないわけで。

空回りしてしまったり、怖気づいてしまったりとどうにも上手くいかない人間は多い。  
が、

「あつ、糸くず制服についてるよ、取ったげるー」

「おつ、サンキューエイミー」

「いえいえどーもー、そういえば昨日のMS見た？」

「おう見てたぜー、そっぴやエイミーが言ってた好きなアーティスト、昨日のMS出てたよな？」

「うんだからずっと見てたよ！けど好きなアーティストが出るの後半でさーもう！酷い引き伸ばしだ！ってちょっと怒りながら見たよ」

とかなんとか楽しく言葉を交わし、カクカクシカジカで会話を切り終え、互いに手を振って別れる俺と元気っ子エイミー。

そのまま彼女は別のクラスメイトの元へ行き、談笑が始まる。

この学校に通う人間って社交的な人多いよなーと思う瞬間である。しっかし元気っ子のエイミーと文科系クールビューティな北見さんの会話ってどんなんだろう？

あんまし接点が見当たらないんだけど、楽しそうに笑ってるしなー。

混ざりに行こうかなと腰を上げ、しかし話題が合わないと辛そうだと思ひ、素直に断念。

けれど上げた腰を素直に降ろすというのは負けた気がして嫌なので、背筋を伸ばしながら周囲を見渡す。

まだちらほらとしか来ていないクラスメイト達。

まあ出欠確認開始まで二十分あるから当然といえば当然で、通学の時間配分もつき始めてるし、十分前ぐらいにならないと教室は騒がしくならない。

という事で手持ち無沙汰の暇人です、立たせた体を持って余してます。なので悪いなーと思うけれど、窓際最前線の席にて、日直の仕事を早々に終わらせて寝こけそうになっている理央にちよっかいをかけに行く事にする。

机に身体を預け、右頬を天板に引っ付かせて目を瞑り、陽の光を存分に浴びて全力で弛っている理央。

そしてその目を瞑った美少女に寄りきりの美少年に顔を近づけ、その耳元で囁いてみる。

「りおー寝た？」

「ふふっ、くすぐったいよお。」

でもなんで寝てる？じゃなくて寝た？って過去形なのかなあ」

「その反応は狙ったかのように素晴らしいけど、それと同時にすい

「残念だよ・・・」

「何が残念なのか知りたくないなあ・・・」

「てつきり熟睡してると思ったよ」

「熟睡しないように頑張りつつ、気持ちいい微睡みを維持してるんだよー」

「I-Eのまつたり和み系マスコットたる由縁が遺憾無く発揮されている事実におののきつつ、人の悪い笑を浮かべてみる。」

「そうか、なら俺も熟睡しないように手伝おうじゃないか」

「とりあえず無防備な左頬をさわさわしたり、軽く摘んでみたりする。めちゃくちゃスベスベで柔らかい。」

さわさわ、つねつね。

至高とか至宝とか言うありきたりな単語じゃこの一品がどれだけ素晴らしく、また希少価値が高いかを伝えることは出来ないし、ならばと手触りを思いつく限りの言葉で余すことなく正確に説明しようものなら日が暮れてしまうことは想像に難くない。

「びたりと言葉を言いはめる事が出来ない貧弱な語彙しか持ち得ない自身に軽い絶望を覚える。」

「だからここはもう考えることを放棄して、珠玉の一品に酔いしれる事にする。」

さわさわ、つねつね。

「りおーなんで止めないんだー永久に続けるぞ?」

「別に優しいし気持ちいいからいいよ。でも時間的に無理なのが

残念だねー」

どうやら微睡みの気持ちよさで何もかもがどうでも良くなってしまっているらしい。

それじゃあ遠慮なしにチャイムが鳴るまで堪能させていただきませんか。

そんな決定を下したところで後ろに気配を感じた。

後ろを振り返れば北見さんが立っていた。

簡略に事実を言えばそれだけのことであり、クラスメイトなんだからありふれた切っ掛けで教室のどこにいても何もおかしくはなく、状況だけ見ればクラスに置ける日常風景でしかありはしない。

まあここでこんな説明を挟んでくるという事は、それはそういう事なわけだ。

簡潔に申し上げるところの異常事態です。

普段表情をシニカルめな微笑で被っているクールビューティ北見さん。

現時点においても怜悯な美人さんであり、ただ普通に会話しているだけでもその美貌と微笑みで奇妙なプレッシャーを男子女子問わず抱かせてしまう彼女。

だけど大好きな読書を邪魔しない限りは普通に良い人なのである。

世話好きで面倒見が良く、周囲を見渡せる冷静さを持ち、見識の高さと理解力の高さを伺わせる見事なハイソサエティ具合である。

が、一つ欠点として不器用さが挙げられる。

例えば表情を作るのが苦手であったり、声に感情を乗せるのが下手であったり。

卒なくこなしすぎて親切が気づかれなかったり、気づかれたらむしろちょっと怖がられたりと不憫な人生を送ってきたそう。

だけどそれを乗り越えようとしている芯強い少女であるし、その努

力の成果もエイミーと気軽に話せていた事から報われつつあると言えよう。

と、ここまで唐突な説明すれば分かるだろう。異常事態の原因は彼女です。

見た目いつもと変わらないように見えるが、シニカルな笑みの端が少しだけピクピクしていたり、氷のような怜悯な視線が少しだけ熱を帯びて圧力を感じさせていたり、ちゃんと呼吸してるのか？と思うほどの冷静さを持つ呼吸機関が少しだけ荒々しかったりと、身体の部分部分が細微にておかしい。

とりあえず目を閉じてすやすや幸せを享受している理央の邪魔にならないように小声で北見さんに話しかけてみる。もちろん俺の手は理央の幸せの手助けと自身の欲求の為に休まず働き続けさせているが。

「羨ましいでしょ」

どうしたの？ではなく、したり顔で挑発するかのように自慢する。

普段の北見さんであるなら、別に。そんな事よりだらしないにやけ面で醜態を晒している貴方の能天気の方が羨ましくなるわよ。

ぐらいの台詞と心を切り裂く侮蔑の笑みと背筋を凍らせる軽蔑の視線が飛んでくるはずである。

勿論別に、からの後半の台詞と表情云々は真っ赤なウソだけど。

北見さんの実際の反応はというと、顔を少し近づけて口に軽く手を当て小声で、

「お願い、少し代わってくれないかしら？」



ほのかに赤くなつた顔と羞恥と期待に震える声で、クールビューティを現在進行系でぶっ壊している北見さんは言ったので、

「嫌だよ」

と小声にて朗らかに応えた。

あからさまにガーンとショックを受ける北見さんに思わず笑みが溢れる。

とりあえずその様子に満足したので、

「ごめんごめん、嘘嘘、理央ファンクラブの副会長に権限を譲渡します。」

けどさつきエイミーと何を話してたのかを教えてくれるかな？言える範囲で構わないよ」

今度は分かりやすく喜色満面の笑みを浮かべて、何度も頷いているうん、その側面をもっと上手く扱えるようになってもらいたい。そうすればもう一段上のステージに彼女は立てると思うから。

まあそれは理央とおいおい詰めていこう。必要のない知識ではあるが、一応理央ファンクラブとは何かを説明しておく、理央以外のクラスメイト全員が所属する理央を温かく見守ろうという有志の集まりである。適当で緩いファンクラブではあるが、理央を弄りすぎて困らせたりする御法度行為がなされた場合の団結力は目を見張るものがある。

実例としてノリと調子に乗りやすい後藤君がパンイチで土下座をさせられたが、愛するからこそその愚行であったと誤解なく許容され、後腐れなく今日に続いている。

そしてそのファンクラブの二大巨頭であるのが俺と北見さんなわけ

である。

「音楽の話だったよ」

「へえー音楽かあ、エイミー音楽好きだしおかしくないけど、音楽の趣味合うの？」

「英美はPOPカルチャーだけじゃなくて音楽全般が大好きな子だから。」

クラシックをよく聴くって話したら話が弾んで、今度おすすめのCDを貸し合いする約束もしたわ」

エイミーの趣味のもう少し踏み込んだ部分と、北見さんの成長具合を知れてそこそこの満足感。

「そっか、良い感じだね。」

もし良かったらだけど、お腹の底に響くようなのでお勧めなの聞かせてよ」

「ええ、分かったわ」

「では権利の移譲といきますか」

笑顔で特等席を譲り渡す。

恐る恐る指を伸ばし、触れた瞬間に幸せの境地にいるかのような表情を浮かべる北見さん。

びくりと少しだけ理央が反応する。

「あれえ、何か触り心地が変わった？」

「右手から左手に入れ替えたんだ」

「ああ、そうなんだあ」

そういつて再び微睡みの奥地に迷い込む理央。  
ちよろすぎる。

まあこの純真さが北見さんを救ったんだから、ケチをつける気はさらさらないんだけどな。

それじゃあと北見さんに手を振り、席に戻る。

また断言しようと思う。

この時の俺はまだまだ安寧の内にあつたと。

### 03・五分間（前書き）

ヒロインの登場です。

### 03・五分間

十五分ほど時間が過ぎており、HRの開始まであと五分という所まで来ていた。

理央を撫でている間、手だけではなく頭の方もちゃんと働かせており、登校してきたクラスメイトに挨拶したり話したりと周囲の様子を伺っていた。

だからほとんどのクラスメイトが教室に着き、騒がしさの要因になったり要員になっている中、二人のクラスメイトがまだ教室に顔を見せていない事に気づいてはいた。

前の席であるクラスメイトは遅刻ギリギリ常習者なので気にも留めないが、隣の席が空いている事はかなり珍しい。

気もそぞろで自分の席に座り、気付けば隣の机を数秒ほど見つめていて、咳いてしまっていた。

そんな一連の動作がとても間延びしたものになるのは仕方がなかったのだ。

「委員長が遅刻とは・・・もう世界が終わるのか。短い人生だったな」

「なに馬鹿なこと言って」

「くそっ、委員長に告白しておけばよかった・・・」

「なあっ」

「そこらへんどう思っよ委員長？」

視線を上げ、顔を赤くして固まっている委員長を見やる。

自分の席に座ろうという段階で委員長が教室に入ってくるのは視界の端に留めていたので、少しだけ演技をしたというわけだ。

硬直から立ち直った委員長はからかわれたと気付いたようで、こぼんと小さく仕切り直しをする。

「何度も言うように私は副クラス委員長で委員長じゃない」

俺と彼女の定型文の一つである挨拶を繰り出し、一区切り。

俺も満足したので突っ込まずに話題を出して場を進める。

「でもどうしたんだ？委員長がギリギリに来るって珍しいだろ」

「んー以前でも普通にあつた事だけど、やり始めると止まらないたちは戒めないとかだわ。」

図書室に行つて調べ物してたら夢中になっちゃつて、気づいたらこんな時間」

やれやれだわ、とため息混じりに呟いた様が自然に決まりすぎて委員長マジ委員長という感じ。

で、そして委員長と呼ぶ云々のくだりを二回続けない所でも出来る女子っぷりを遺憾なく発揮していると云える。

実際委員長は出来る人間で、入試をトップで通過した才女であり、度量の広い器だが締めるところはきっちり締めれる人情家、義理堅く約束を違える事のない誠実な人となりを持ち、清濁が背中合わせであることを理解し、されど清廉で義侠心に溢れた心を忘れない高潔な人物である。

「そうなるうとは思うけど、何も実績を見せてないでしょうが。」

本当に、からかうのも程々にしてよね」

なりたいと思うではなく、なるうと思うと言っ。  
この心のあり方の差異は小さいようで大きいと思う。

「誰に聴かせるでもなく言った説明にきっちり突っ込む委員長の生真面目さは好ましいと思う。」

それに今日は委員長自身のせいで俺が委員長をからかうのが遅くなっただけだからさ、その責任は負うべきだと思うんだが？」

「前半の優しい笑みと発言が後半で台無しだ！

すごい妄言を偉そうな口調とドヤ顔で言われたんだけどどうして処理してくれようっ」

矢継ぎ早の押収が楽しくてしようがなく、その反応もやっぱり面白く、このクラスに居れる限りは見続けていたいと思う。

・・・って、そっだ。居れる限りって言うか、もう転校もしなくていいんだから、気にする部分じゃないのか。  
そう思い至って、笑みが自然と深くなる。

「なに聞き流して笑ってんのよ！はなしを聞きなさいってば！」

「聞く聞く、委員長は怒ってる姿可愛いし、声も好みだからいくらでも鑑賞するって」

「っあ！

・・・こいつは、するりと恥ずかしげもなく真顔で言うからたちが悪い」

顔を真っ赤にする委員長を心の底から可愛いと思い、もっと見たいと追撃をかけようとして、

ガララッ

「おっはよーっうす、後藤大輔ここに見参！」

キーンコーンカーンコーン

自己主張の激しい三重奏が響きわたり、シーンとなる教室。まるでその一時の騒音に音を呑まれたような印象を受ける。

「あー々HRで出席確認って面倒くせーよなー」

「俺も思う、クラス見渡せば誰がいないかすぐわかるのに点呼すんのな」

「それじゃあまた休み時間ねー」

「うんまたねー」

「あれえ、北見さん？」

「いや、あの、これはですね、何かの策略でして、えっと、えーつと、とにかくそれでは！」

とクラスメイトが散りっていく。

我がクラス定番の光景です。

俺と委員長にとっては一時休戦の合図となっている。

俺に詰め寄っていた委員長もため息混じりにおとなしく席につき、HR後の授業の準備を始めた。

そして俺はというと前を向き、クラスメイトに挨拶をしながらやってきたやたら元気なムードメーカーである後藤君を迎える。

「おっはよー、最近調子どうでっかー儲かってまっかー」

「今日はまた古臭いノリ引っさげてきたな、とりあえずぼちぼちでんなー」。

なんか時間かなり際どかったっぼいけど、今日も練習大変だった



みたいだな」

後藤君は野球の特待生であり、仮入部もなにもかもをすっ飛ばしてもう練習に参加している強者である。

この学園の野球部はかなりの強豪で、厳しい練習を朝練終了時刻ギリギリまで行なっているらしく、その後の片付け、シャワー、着替えとなると教室に着くのが遅くなるのは仕方のないことである。

遅刻ギリギリは彼の怠慢ゆえではなく、むしろ皆より早く起きて厳しい練習を行なってる彼は賞賛に値する人物なのだと言っておく。

「そうなのよ、マジで千本ノックとか朝にしちゃうわけよ先輩方はあ、もちろん一人千本じゃなくて一球一球交代すんだけどさ、途中でこぼすとノルマが増えんのよ。」

マジで身も心も疲れきるっての」

登校とHRまでの時間が他のクラスメイトの戦いの場となるが、彼の場合はHRでの会話が調子を上げるための前哨戦となるわけで、担任に怒られても懲りずに話しかけてくる。

とぼつちりがたまに飛んでくるが、楽しいからいいやと割り切っている。

そんな風に後藤君と話しつつ、先生が来るまではたまに委員長がツッコミを入れてきてくれるこの風景もずっと見続けていきたいと願っている日常の一つであり、続けるための努力は惜しまない。

もちろん朝の短い時間でもこれだけ大切な時間があるわけで、この後の休み時間、昼休み、放課後の時間にもまだまだ大切な場面はある。

それを思い描いて心が震わせる自分がいた。

しつこいようですがまた断言しようと思う、この時間は平穩無事の

幸せを甘受できていたと。

だからまだ断言する、そんな甘っちょろい時間はここで終わってしまっただと言っことを。

### 03・五分間（後書き）

前回と今回は一つだったのですが、長かったので分割しました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4755z/>

---

さっちんとかーくん

2011年12月19日01時45分発行